

報 談  
奇 誰

自來也說話

五下

~ 13  
3329  
6



門 へ 13  
巻 3329  
6

鏡浦樓雙言 併勇侶吉郎推澤家瑞良下条

天正十年八月廿日寄  
本大學出版部贈

且說天眼儀共訪多先八幡山へ逃来り西天草へ家那一品を自來也

子渡 後より剛右衛門 追跑来り有枝有葉大首借ハ疾侶吉義鳥ハ夫社

軍太夫おとせ地刃を自來也換止くくく天眼を傷く往還へ出り那有

追来せ願ハ相崎 逃行鏡浦へ延到多々 敵討の場取ハ境ハ

浦究竟地形れを侶吉義鳥ハ支度做一先廻り天眼を追来り力の強

軍太夫おとせハ各名入合て勝負成交せり小賊も許多あせを助釘出

人殺も遣ハ倉り破と一個の敵も兩個討人形を其上に助釘ありて

後日此合致念あり後ハ復奉にありても兩個を討止よ昂も海あり

那取に到りては鋪捨有看取あり下と言とくハ願ハハ侶吉義鳥

日本書紀卷之五

一



天  
眼  
自  
來  
也  
西  
天  
海  
邊



百  
三  
七  
言  
卷  
之  
五  
一

命はとて多と助御持憑申さんと勇ましく支度の中天眼を亦復性還へ  
 出る俊やまに剛右衛門の息をたうり子馳来り夫と飲やうやそれ儀は  
 大恩を忘れ取遣儀也非人さりぬるを罪も鏡はせんぬ  
 大切に三つおのれに子孫に傳へるべき事なり若千もよへ遣へと雖も向十間  
 なるに近奇をそと品こそ世に出入用ごとと天眼亦復馳出り柏が崎あり  
 淺い浦へ抜出れをそと剛右衛門の道と後を暮し何国連りて追まら  
 ぬと房が鏡が浦と向を場所、お續する砂地の濱道あり、東海上  
 北の柏が崎の街並あり、後山を又此浦晴天の中、駿陽乃芙蓉峯海上に  
 松を移りて土人鏡浦と申傳ふ絶妙の景地なり、然るに、侶吉義を以  
 立派に申す事なり、此子到り日暮れ念願今這時鹿野花はる

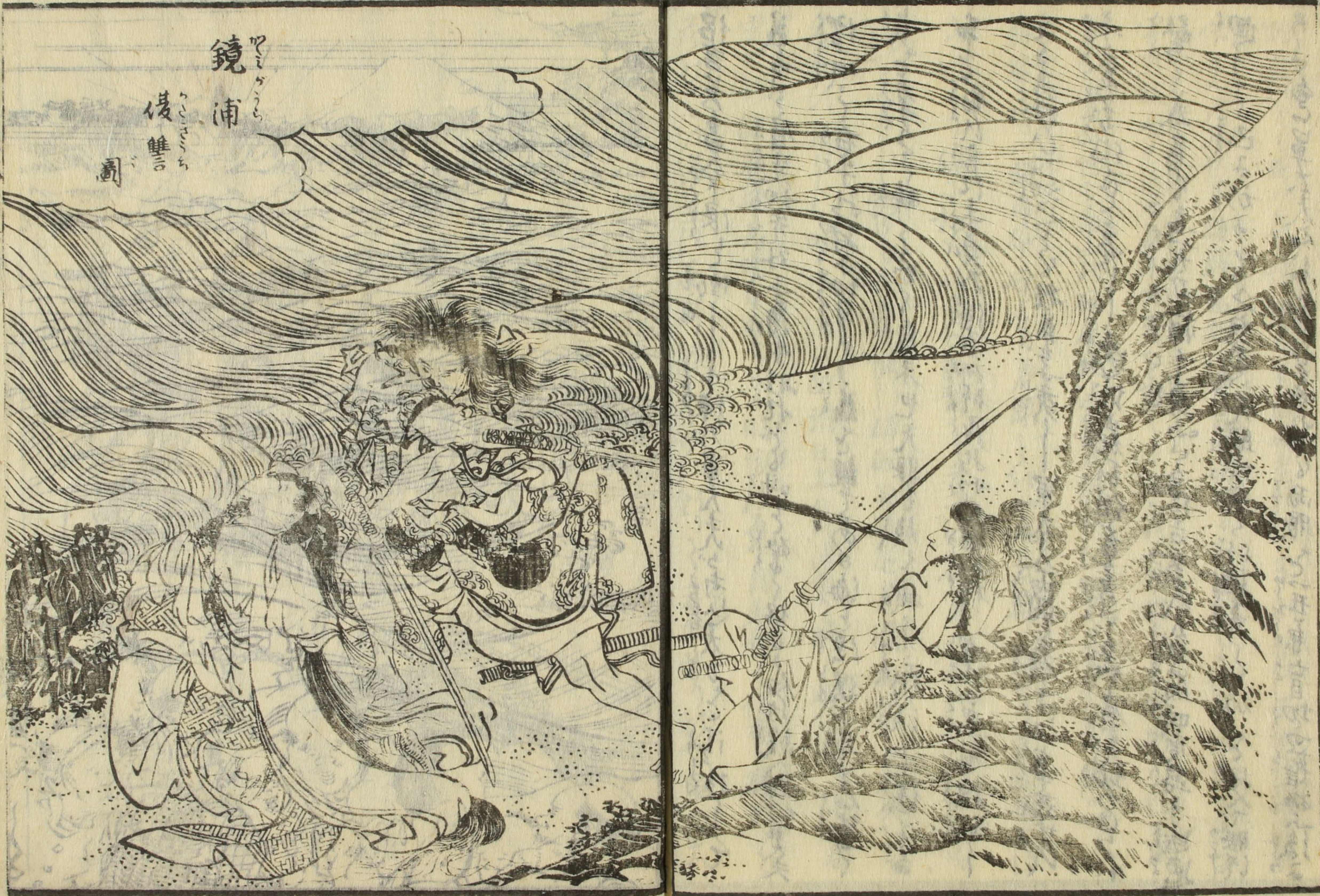
やと一刻千灯の如きとあり、目打を渡り、鯉白寛介我くと伝ふより  
 と眼を自來也此又國子任せ剛右衛門を延到浦傳へて述す此地を  
 眺むるに遠き剛右衛門同はるぬ地軍大夫あり、伝ふけりる侶吉義を  
 痛中、立派に述す遠に越城をとり、事い鹿野花軍大夫あり、や形をそ  
 勇原太郎、房が鏡が浦、子孫に傳へるべき事なり、若千もよへ遣へと雖も向十間  
 出る俊やまに剛右衛門の息をたうり子馳来り夫と飲やうやそれ儀は  
 大恩を忘れ取遣儀也非人さりぬるを罪も鏡はせんぬ  
 大切に三つおのれに子孫に傳へるべき事なり若千もよへ遣へと雖も向十間  
 なるに近奇をそと品こそ世に出入用ごとと天眼亦復馳出り柏が崎あり  
 淺い浦へ抜出れをそと剛右衛門の道と後を暮し何国連りて追まら  
 ぬと房が鏡が浦と向を場所、お續する砂地の濱道あり、東海上  
 北の柏が崎の街並あり、後山を又此浦晴天の中、駿陽乃芙蓉峯海上に  
 松を移りて土人鏡浦と申傳ふ絶妙の景地なり、然るに、侶吉義を以  
 立派に申す事なり、此子到り日暮れ念願今這時鹿野花はる

口惜やたにへ飯令西天竹のくもとて世等と此の者幾許ありとも

物乃救とて想ひや、樽に天眼儀を、復奉り相伴、兩個の真途に  
 供足、活おせと、腰紐、意、後、侶吉、目、切、の、お、意、得、と、侶吉、美、鳥、方、を、  
 宗、比、抜、合、せ、退、ろ、を、ろ、大、花、を、敷、一、各、お、り、砂、地、乃、是、場、砂、上、往、一、未、  
 勇、を、奮、ひ、恰、北、南、山、北、猛、虎、北、海、の、蒼、龍、共、に、勢、を、奮、て、交、り、開、く、如、  
 龍、怒、る、時、ハ、頭、角、掣、繰、り、虎、聞、と、似、ハ、兎、牙、搦、悪、り、天、眼、儀、を、  
 之、始、り、傍、小、扣、し、筋、負、の、勤、靜、を、手、小、汗、握、着、て、あ、れ、ん、沖、漕、舟、  
 錠、を、下、一、釣、中、の、良、由、や、烟、川、舟、船、皆、破、断、く、漕、舟、と、此、筋、負、を、  
 着、物、に、折、し、も、晴、ある、海、の、面、斜、日、よ、れ、浪、の、う、れ、輝、に、渡、り、陸、地、を、  
 男、女、共、諸、着、取、尺、地、に、り、り、る、時、成、筋、負、自、來、也、ハ、侶、吉、が、過、り、之、を、  
 老、り、て、海、邊、笠、に、面、鉢、懸、一、世、に、到、り、く、者、取、せ、り、妙、て、軍、大、夫、

侶吉、弟、も、令、限、と、働、一、手、練、乃、軍、大、夫、が、お、り、天、刀、を、法、極、く、て、  
 義、も、が、肩、先、切、先、外、小、筋、半、形、れ、と、叫、と、驚、く、侶、吉、が、妙、に、續、へ、跟、ハ、軍、大、  
 指、掛、く、右、手、筋、外、切、り、筋、を、觀、て、あ、る、海、と、浪、俱、小、生、る、心、地、も、  
 氣、を、奪、り、く、碎、く、ふ、如、く、自、來、也、天、眼、も、鼓、を、掛、手、筋、に、挂、一、億、五、  
 布、と、勤、人、言、に、手、負、乃、侶、吉、所、修、履、持、り、く、生、極、く、筆、の、墨、髪、揺、乱、  
 一、其、事、の、様、に、切、込、と、も、枝、葉、多、く、来、一、軍、大、夫、兩、個、を、對、手、に、事、共、せ、  
 予、交、多、化、心、と、多、く、一、水、代、家、親、ハ、侶、吉、を、あ、く、り、や、肩、先、切、つ、ら、れ、  
 驚、く、美、鳥、も、亦、大、刀、痛、手、負、つ、る、侶、吉、女、夫、太、刀、筋、四、度、路、を、透、  
 廻、く、己、子、筋、あ、れ、ろ、之、お、重、ハ、天、眼、を、多、く、以、地、着、く、砂、と、掛、合、眼、  
 う、く、重、ハ、軍、大、夫、ハ、や、ら、け、は、を、お、れ、も、兩、眼、を、一、在、兼、亡、目、切、の、難、拂、  
 一、

天刀記卷之五下



鏡浦

倭雙

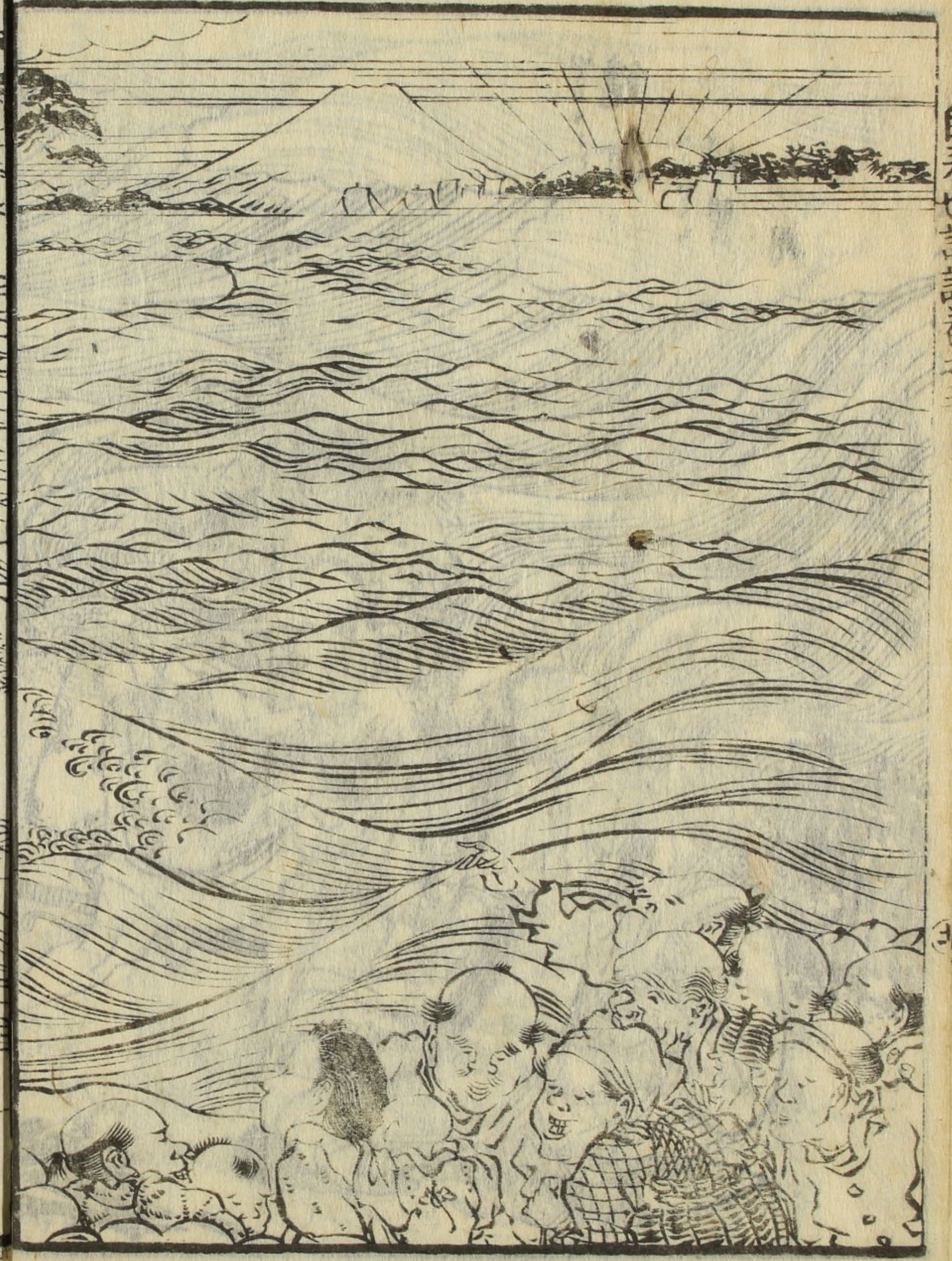
圖

自和世誠謙

四



其二



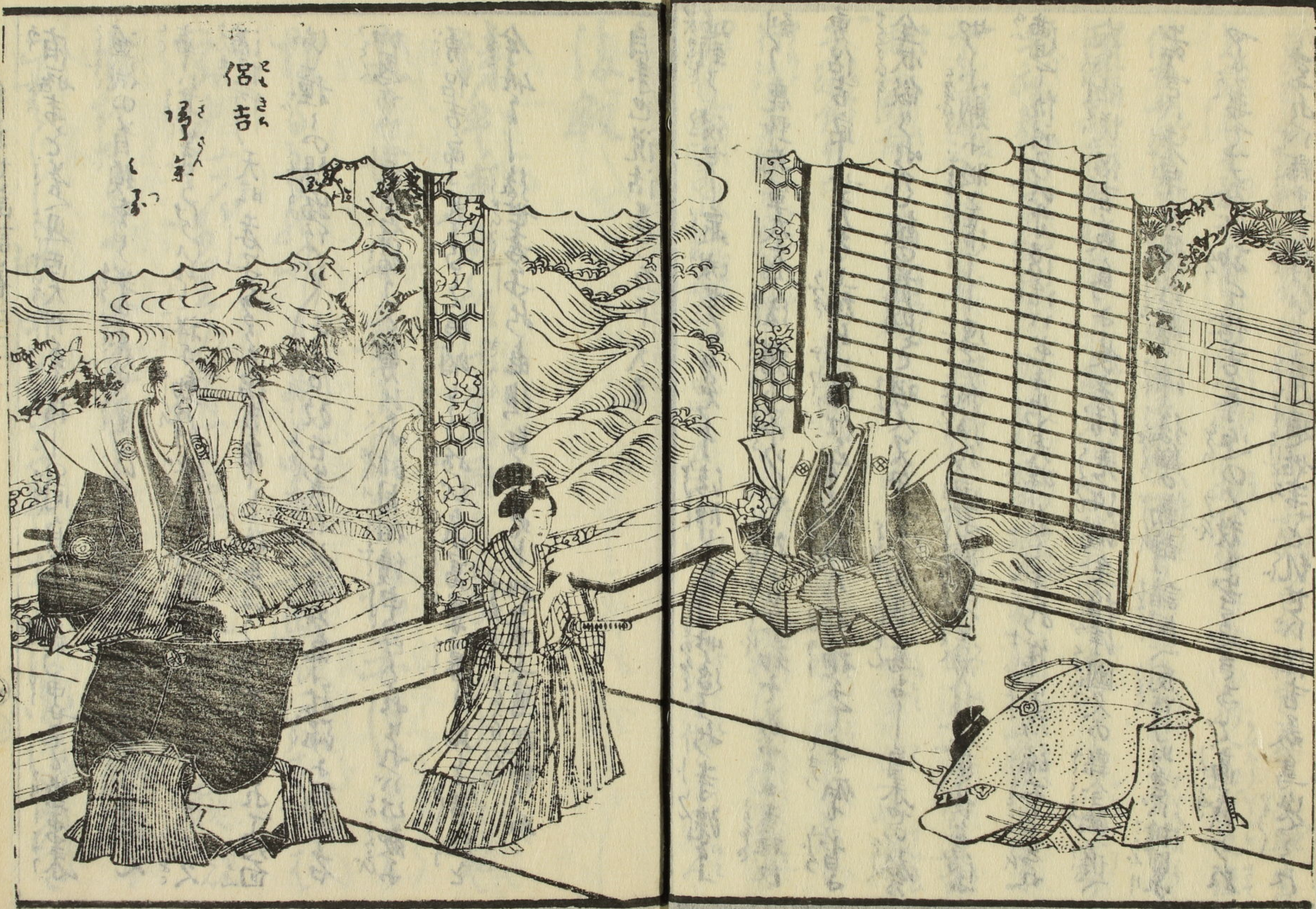
透逸ゆがし義もが一念着先より脊後焚きお切ぬるも息ひらき  
侶吉が拂ふ刀ハ軍大夫が殺にきき切らるる流るる軍人丈も行口足可  
膝を地をけし兩個をききり対手に切抜るる義もがきき息切れ  
傍にお砂地子削ぬる自來也今ハ場集てお出ぬ手裏劔も過肩間  
すし軍大夫全人お所お痛手流るる血汐子兩眼裏に倒れぬ  
薙太刀を侶吉消らるる跳返さるお込太刀法損もる鹿野花着先  
より幣あて一尺けり切ぬるめ地廻るる沼田おハ自來也始諸着取ぬ地よ  
と悦やを止まると侶吉もきき自來也とらるは祖又お命と  
目おき軍大夫もきき手お音一通りお付取てハ事足も一揺動も  
苦痛を解ると殺らるるもに侶吉郎先軍大夫が右に流るるお流るる  
眼汁ハ働も苦氣おお起きと身を咽わハ又西足を切初ぬれ倒れ  
るハ息も絶るんとらるるお高元一兵大又半もぬれ刺通義鳥  
素と侶吉がききおきき喜跟むと起立時歸らるるお悦や  
荷敵軍大夫おお母祖又お仇るるおたの腕お流るる返らるる  
咽吹き後子仔子お助起て天眼地奇助起て今抱做侶吉郎  
も痛手に不在大音上祖父の敵又母の仇鹿野充軍大夫今も其辱  
もよと五騎臊子切頭て脊後子立廻り首打落るるお最做  
ある人らと吐と同一に哭き敵軍流るるお鼻て涙も一怒軍大夫お前子那  
まの敵を忘れ酒狂は時天眼子口連たき人少申せぬく不日  
して命をききぬるも不審あり此時喜樂お流るる太常衣重か

白米日記



象形影お如く子孫れいしとて、  
 又之をそがて自來也、小賊を拓也、  
 侶吉、白八郎、後、是、澤、倉、君、子、立、我、權、世、乃、と、東、依、當、經、り、市、地、等、  
 西、側、の、一、帯、平、野、を、と、も、悉、意、計、を、除、け、を、氣、遣、は、し、八、幡、寺、到、り、  
 手、麻、養、生、平、也、お、後、何、討、乃、始、未、推、津、家、へ、海、田、名、我、長、生、  
 中、也、此、地、を、知、は、る、西、天、竹、を、推、津、家、へ、回、り、今、今、地、を、我、  
 想、小、動、靜、あ、ま、い、今、構、く、る、が、年、に、お、置、け、此、事、も、傳、へ、再、會、  
 之、澤、倉、を、さ、さ、く、と、自、來、也、に、依、信、這、を、立、退、て、何、不、と、も、恐、く、  
 行、海、天、賊、も、渡、を、流、何、想、い、之、警、め、と、切、拂、い、を、亦、も、恐、近、  
 造、り、惡、事、の、上、計、畧、あ、ら、う、軍、人、夫、と、師、事、お、約、も、做、し、る、人、

延、到、く、討、せ、衆、賊、せ、ん、も、あ、ら、う、法、師、と、あ、り、世、邊、ら、お、寺、院、を、  
 到、り、鹿、野、苑、軍、太、夫、が、後、纏、子、吊、り、ん、を、行、方、不、知、を、ぬ、か、り、去、程、に、  
 勇、侶、吉、帛、其、夫、を、上、徳、お、以、信、に、し、り、小、賊、乃、今、抱、き、牛、原、を、首、子、  
 全、伏、做、り、ぬ、を、敵、の、首、領、を、謀、入、又、母、子、牛、向、返、薦、を、一、自、來、也、の、敵、  
 妙、小、賊、小、賊、と、遣、し、一、連、子、賊、は、お、国、子、親、先、皇、原、村、を、賊、長、生、乃、  
 遭、て、仇、討、乃、以、身、活、活、は、せ、し、申、夫、婦、ら、を、手、お、押、是、乃、端、を、と、ま、れ、  
 大、不、依、悦、侶、吉、義、身、子、長、生、活、着、海、城、主、推、津、國、久、の、縣、全、廢、へ、海、  
 出、身、を、老、早、も、房、及、鏡、の、浦、復、讎、の、動、靜、諸、國、へ、回、り、ぬ、き、推、津、家、  
 中、も、事、を、す、む、び、却、て、侶、吉、帛、の、人、教、も、出、る、と、き、あ、ら、う、高、義、お、れ、  
 一、の、あ、ら、う、縣、吏、も、侍、し、と、書、一、通、始、末、を、記、せ、る、侶、吉、義、身、逃、ら、ん、



侶吉

吉

吉

有始末と云々且西天州を権一の間自來世の申せし事集事  
盜賊の首領を半巨義と申ししものゆゑに逆地を回奉らん  
事集事うけいしと詳し勅諭速まらば縣吏に有申事も因之  
満行り天晴存子あり身侶吉而と祈り乃め考ふる面  
種一の場ありその後改百善れ又源を命し孫孫百善石  
加恩あり三百石賜りて勇れは目相續申つけられは故に  
勇侶吉而義もいと姪婿とて孫に富貴を奉りぬと昔語と  
今世に後世存子に龜澤ありと申し世幸子寫記たりぬ

自來世説話卷之五下 大序

後叙

詩を声あはれに畫画と象あはれに話と云々  
又を世乃りて書きたるもの詩の本けり  
なるもあやとやと云々子画にけり  
実かに美里の清と結んれと子千載  
古今と云々の美象と云々  
子と云々

山と歌人結縁せし自來也のひひ及に  
復離言乃功成此一人物と驚歎せし見  
上傍地入此東收り於起るも隠き處を  
那し埋れざる故あきさら如く此等の  
賞はるる如く此の世の世の録するを聞く  
心を平くし身は修る中名は穢く性み  
中々人にも感ある身は主は福あり

あつと可きしつゝいれおのりしは後中を  
せし中をいれおのりし事おのりしは中を  
とせし中をいれおのりし事おのりしは中を  
唯あつと可きしつゝいれおのりしは後中を

千代屋彦美の電



自來也 詩言卷之四

這う自來也 生渥乃行狀 奇例併西天尊の事  
万里破魔く候と出逢ふのあり 不殘後篇より  
去る一 倭一覽ヤリ

感和亭鬼武著



蹄齋北馬畫



文化三丙寅歲

孟春

軍書小説類藏板目錄

大坂心齋橋通 南久寶寺町

伊丹屋善兵衛

源平盛衰記

片假名

廿五冊

後太平記

片假名

廿五冊

殘太平記

同

十二冊

四國軍記

同

十二冊

駿臺雜話

平かな

五冊

續武將感狀記

同

十冊

室鳩巢の著を以て仁義の大なるを稱して鬼神の託和漢古今名將勇士の言行を評して其の要諦を法和并行文の論述老傳の見あり

聖德太子傳圖會

平かな

六冊

捕正行戦功圖會

平かな

十二冊

畫本西遊全傳

四十冊

太田道灌雄飛錄

六冊

繪本玉藻譚

五冊

左衛門大夫太田持資入道源三位親政の孫 源朝成の子孫の傳記 其の要諦を法和并行文の論述老傳の見あり

同白狐傳

一名白狐傳

十冊

大坂心齋橋通

復讐言山見英雄録

全部 五十冊

此書三編まで作者各著あり四編以下廿九冊二家の多筆にて記述あり山見氏とて通編結句の主人公とて記述あり水鏡の五傑と稱する勇士の功を記述する由縁の賊徒討滅天樹立の復讐を主眼とする作者の新案を費せり七編の結局を餘計の一巻あり八冊を以て一部と

刀筆青砥碑

八冊

此書水鏡の筆子原稿を曲亭翁の筆削せしむる正の筆を以て名を刺々傳て愛妻於祿を殺し奸夫偽二帝を購りて盜賊を誣平して殺さんとすを青砥藤岡の明断各その罪を照して懲せる佳話妙筆とす

室小室の八巻

八冊

下野公武岡城主武望の家長平四郎國範が忠心遠征の事新平公卿が奸物誤疑を教ふる事平四郎を誣する事思ふ事武望の面白く

鎌倉年代圖會

五冊

我が邦鎌倉の創業より宗室親王の南向志ゆふまで於て將軍家五代の間の時事を委くする

鎌倉大樹家譜

五冊

宗室親王鎌倉の幕府より累世統緒を継ぐ悪の文雄北條が二門亡びて後醍醐帝天下を平定するまであり

武藏坊辨慶異傳

十冊

聖世中が水滸傳の面目を撰て變化する

大内多々羅軍記

六冊

大内義隆の誇着風流より壁屋相良の倅智浪人服袴を罷ふ隘れを妻と君と進

世俗のりりて傳ふる安於の事奈と善業をいれらるる他より紙を

繪本金花談

十二冊

同 雪鏡談

十二冊

同 二鳩英雄記

十冊

同 彦山靈驗記

十冊

同 龜山話

十冊

同 合邦辻

十冊

同 淺州靈驗記

十冊

同 金毘羅神靈記

十冊

同 誠忠傳

十冊

同 孝感傳

十冊

同 頭勇録

十冊

同 奇縁傳

十冊

同 忠孝美善録

十冊

同 伊賀越孝勇傳

七冊

同 檀之二葉

六冊

むらさ 妖婦生約の方より陶屋張る騒賢の  
大悪逆など正史に出入せる面白秘史あり

近江縣物語

五冊

花山院の侍代あると上梅丸が全信より  
盜賊系保輔齋の本が強暴に橋安世が  
女園生が負操安世が甥常く邪慾腫瘍の  
梅丸よりこれ光の及子謂てう賊徒狂  
の大將軍系保昌を助けて賊を平す  
近江掃部進み生の又母子逢一信法してその  
文の妙ありて園して知るべし

昔語松虫墳

六冊

建武の乱は河内野田本郎傳  
義勇妹桂子と母楓が奸偽安井軍を  
悪田勝美義里と母田の奸偽本海八妻  
松せが狂州本海太郎と神崎の遊女本と孝心  
松虫墳経塚をの由来とあるす

今昔二牧繪州紙

六冊

天文の頃より播磨國三木の城主別所長宗の  
菴崎は夫と妻と子とありて夫は年破山松松  
遠原勇亮とあり松松三郎左衛門の外思ま高  
村の能優が義直をとりて絶る話とあり

忠孝貞婦傳

六冊

大庭信實信澄八股田阪右衛門が設計し中ら  
て自害し妻の里人と赤祿寺田野助が貞烈  
忠勇して寛を雪たし幕府あり

復讐言十丈松

七冊

近江の土松井逸高浪人條村大花子殿被  
れそを齊兩人三年寛家と密に青柳佐市  
らと友とあり河波の條村と志と連し信

忠孝人龍傳

五冊

北野 二葉此梅

六冊

奥州山白屋の長條崎三郎右衛門といふもの  
十田民被を欺死に松田伊織と斬せし  
田夫婦と民被が牙民被が義理はホッ究魂  
民被が庶子民五郎といふ童に憑て復讐  
させしを報せり

十かえり花

六冊

建久年中本出河の山縣の御士常盤井内記素  
則二男二郎美入仙仙一誘れて教と  
仙去来見と昇天する奇談奇事といふべし

彌生佐久屋

六冊

彌生の良長因幡左道々見弥生主と佐倉源八  
とあり佐倉兵衛とあり子二郎が胆勇教育の  
故を除け入道田の里を極富が女児白鳥の奇  
遇は子軍を輪術秋山大膳と信長八重雷  
重九が滅亡は八流のり説とあり

花標因縁車

五冊

高井主の長眼を十勝長衣家の長と再会  
と上方に出て百子挿に終る二百銘両の  
を携帰と路指針出教あり強盜意四郎

玉搔頭

五冊

三光の橋のりを主しする活説として上野  
高井主の長眼を十勝長衣家の長と再会  
と上方に出て百子挿に終る二百銘両の  
を携帰と路指針出教あり強盜意四郎

流前の士人東條國書幼年より父助を  
夫が仇山中社二郎を年久く伺ひ探り後  
小和州郡山より復讐せし事案を深  
て洛常の僧壽子に託して其あり

南部 小栗忠孝記 五冊

敵討 小栗忠孝の竹内教吾内藩に赴き  
小栗忠孝と信じて其子人を討殺させし  
小栗忠孝の復讐終りし後其子を得し  
河原忠孝の妻子小栗忠孝を討殺せし  
百二郎小栗忠孝の仇を討せし事案あり

長崎聞見録 五冊

理齋隨筆 六冊

和漢の雜事 何れも一冊あり  
益鮮中 一冊あり

金屋金五郎全傳 五冊  
南越の市人金五郎の風俗ありて其使  
南越の市人金五郎の風俗ありて其使  
南越の市人金五郎の風俗ありて其使  
南越の市人金五郎の風俗ありて其使

輪廻物語 五冊

輪廻物語 五冊  
南越の市人金五郎の風俗ありて其使  
南越の市人金五郎の風俗ありて其使  
南越の市人金五郎の風俗ありて其使  
南越の市人金五郎の風俗ありて其使

風流茶人氣質 五冊

風流茶人氣質 五冊  
南越の市人金五郎の風俗ありて其使  
南越の市人金五郎の風俗ありて其使  
南越の市人金五郎の風俗ありて其使  
南越の市人金五郎の風俗ありて其使

東西兩本願寺来由 繪本石山軍記 初編十冊出版 二編十冊副刻

土屋正義編述 松川半山画

此書は本願寺源流より第八代蓮如上人自ら記述を子の与虎に  
呈指物生玉の荘内石山法堂と其刻しゆより第十一代蓮如上人の  
到り織田信長此地の要塞とせし本願寺を退け堺郭を築りんと  
如上人と十餘年の戦争に終り本願寺の東海とあり其子の  
配織田の大軍派の計とて其討ち攻め等不悞し其本願寺の要  
我同輩人先登九字の名号の奇蹟根柢小栗忠孝血戦討ち相争  
の英智守幸と徹法守幸と決して小栗忠孝の名我淀川入水  
勅命に依り其上人石山并堺に記述あり其上人の  
之と改る時其是は其智克秀本願寺に依り其上人の



モリヨセテハイソウ  
泰の宮子殿を以て終末源六段と號し  
大友と耳利と知陸一  
上人等と再と出て  
法堂と造學  
東西  
陸山の  
備  
逃る

大阪府下南久寶寺町四丁目

出版人 前川善兵衛

繡像復讐言山石見英雄録 全部 五十冊

南流 玉藻 主人 編輯  
浪花 一葉 高 歌川 芳梅 画

○初編 系師人作 二編 玉藻主人詞書 三編 泉湯子綱著 第四輯以下作者一家  
永禄天正の頃筑前名嶋の勇士岩見重太郎 橋本季生より 武者修初  
日一 田の武功大蛇の害を除去 老練の妖を鎮め 勇威を現れ 天の橋立あり  
廣瀬成徳大川亦三人の大敵を撃て 父兄の怨恨を晴し 終に室町殿に奉仕して 任官  
一 鈴木水正は 敵を撃つる間 子言を擧 豪が良邪 淫婦 岩瀬孝女 新月水正  
鈴 眞の五雄と稱する勇士の列傳 靈猿惡魚の怪談 亦五輯より 益々入佳境 新話あり

浪花書肆 前川善兵衛藏

南久寶寺町心齋橋西入

